

まず、「1・戦後の経済復興」の展示を見てみましょう

日本が第2次世界大戦でこうむった痛手から立ち直ろうとしていた頃、1951年に開設された明治大学商学部^{しょうがくぶ}の資料室は、商品をつくる材料として注目を集めていた新素材を収集しました。

Q 石油を原料とする新素材にはどのようなものがあったでしょうか？

次に、「2. 高度経済成長期の光と影」を見てみましょう

輪島塗^{わじまぬり}のお椀ができるまでを順に示した見本があります。木地に^{したじ}下地をして漆を何度もぬり重ねて作る、古くからの伝統的なつくり方です。



Q 輪島塗のお椀はどのような材料から出来ているだろうか？

あてはまるものに○をつけてください。

- ①木材 ②漆 ③珪藻土（けいそう土） ③布 ④天然ゴム

輪島塗のお椀の完成品の隣に並ぶのは、1950年代から普及し始めたプラスチック製のお椀です。どちらが天然の漆塗り^{ぬり}でどちらがプラスチック製か見分けがつきますか？ 手間のかかる伝統工芸の器は値段が高くなるため、高度経済成長期（1955年頃～1973年頃）の頃には、生活実用品としては代わりにプラスチック製品など機械工業製品^{ふきゅう}が普及しました。

では、反対側の「3. 時代の転換期」に移動しましょう

1980 年代の後半には、新興国からの安価な品が多く輸入されるようになり、実用品としての伝統工芸品はますます姿を消してゆきました。

Q 本来の用途から外れて装飾品となった工芸品にどのようなものがあるだろうか？

高級品として生き残っていた伝統工芸品も、1990 年代に経済不況が訪れると、需用を大きく減らし産地の規模は縮小をよぎなくされました。

そして、「4. “現代”を映す伝統工芸」へ

安価でかつ大量に作ることでできるプラスチック製品は人々の生活に利便性をもたらしましたが、廃棄による環境汚染や人体への有害性が問題視されるようになりました。

今日では、SDG s の考え方から大量生産・大量消費という生活スタイルを見直すことが求められています。値段は高いけれど価値ある商品として再び伝統工芸品に注目する動きがあります。

展示パネルから現代の社会を読み解くキーワードを探してみましょう。

Q 「人間性への回帰」のパネルを読んで下記の文字を埋めてください。

モノづくりに対する を知り、道具に をもつ。

Q 「自然素材への志向」のパネルを読んで下記の文字を埋めてください。

可能な社会をつくるため、自然の 力とバランスの取れた消費を目指す。

